考察１（お世話の実態）

回答者全体 2,003 人のうち、62 人（約 3%）が家族の世話を行っていると回答しており、お世話の相手は、62 人のうち 44 人がきょうだい、17 人が父母であった。高砂市でも一定数の中学生が家庭内での役割を担っている現状を示している。

世話の内容は、家事（食事の準備や掃除、洗濯）、次いで、話し相手になる、転んだり危ないことをしないか見守るであった。なかでも、家事が約 56%と半数を超える結果となった。

お世話による生活への影響は、特にないが最も多く、次いで自分の時間がとれない、睡眠が十分にとれないという結果となった。お世話によるしんどさについては、しんどさを感じている回答は少ないが、世話が習慣化し、本人が負担を感じにくい状況が推察される。

こども自身が家庭内での自分の置かれている状況を自覚しにくいという特性を踏まえ、周囲の大人がこどもの異変やサインに気づくことが重要になる。

考察２（ヤングケアラー認知度と周知）

ヤングケアラーの認知度は、聞いたことがあるが全体の約 33%、聞いたことがあって内容もよく知っているは全体の約 12%にとどまっている。ヤングケアラーに関する理解の普及については、引き続き取り組みが必要な状況である。

自由記述の「ヤングケアラーという言葉をもっと広めて知っている人を多くする」の意見のとおり、ヤングケアラーの理解が広く普及するよう引き続き周知・啓発を行う必要がある。周知の具体的な方法としては、「動画の見る機会を増やしたらいいと思う」「パンフレットを作成したらいい」「定期的にアンケートを実施する」などのこどもの意見を参考に、動画の視聴機会を拡充するなど、効果的な周知・啓発に取り組んでいきたい。

また、「今回の解説動画で初めてヤングケアラーを知った」「解説動画が分かりやすかった」といった意見も多く寄せられた。

考察３（こどもの相談状況）

家族の世話について相談したことがある生徒は 14 人（23%）、相談したことがないは 48 名（77%）であった。そのうち、相談できる大人がいるは 38 人（79%）、いないが 10 名（21%）であった。

主な相談先としては、家族や友達、学校の先生が挙げられる。一方で、相談していない生徒の理由には、「誰かに相談するほどの悩みではない」や「相談しても状況が

変わるとは思わない」と感じている回答が多く、ヤングケアラーの悩みや負担が周囲に理解されにくい現状がうかがえる。

家族の世話について相談したことがなく、また相談できる大人がいない生徒が一定数いるなど、相談につながりにくいことが判明した。

考察４（必要としている支援）

学校や周りの大人に助けてほしいことや必要としている支援については、「特にない」「わからない」を除くと、「自分の今の状況について話を聞いてほしい」「自由に使える時間が欲しい」の回答が多く、その他には少数であるが、進路や就職など将来の相談にのってほしいとの回答であった。

これらの結果から、こどもたちは身近な大人に自分の状況や気持ち、将来の相談などを聞いてもらうことや、自分のために使える時間を求めていることが分かった。

こどもまどぐち課は、たかさごっこ　結っくりん相談を開始するなど、こどもが直接相談できる体制を整備している。実態調査を通じて、こどもたちが SOS を発信する機会を確保することに加えて、相談窓口の周知啓発の強化による相談につながりやすい環境の整備が、早期支援への第一歩と考えられる。